

# 平成9年度滑川市埋蔵文化財発掘調査概報

1998年3月

滑川市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は国庫補助および県補助を受けて実施した、平成9年度の滑川市内における埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。本書に取りあげる調査は、個人住宅建設に伴う魚軋遺跡本調査および共同住宅建設に伴う上小泉西遺跡ならびに個人住宅建設に伴う上梅沢館跡試掘調査である。
- 2 調査事務局は滑川市教育委員会生涯学習課に置き、主任宮本幸雄および学芸員野末浩之が調査事務を担当し、教育委員会事務局次長兼生涯学習課長事務取扱酒井俊雄が総括した。
- 3 発掘作業員は徳滑川市シルバー人材センターの協力を得た。
- 4 出土遺物の整理、本書の執筆・編集は野末が行った。
- 5 調査にあたり、以下の方々から指導・協力・教示をいただいた。記して謝意を表すものである。  
上野 章、宮田進一、橋本正春、安念幹倫、高梨清志、高橋真美（以上富山県埋蔵文化財センター）  
高慶 孝（上市町教育委員会）
- 6 調査に係る出土遺物、図面・写真等の記録は滑川市教育委員会が保管している。

## 目　　次

I 魚軋遺跡	2
II 上小泉西遺跡	12
III 上梅沢館跡	14



図1 調査遺跡および周辺の遺跡 (1 : 25,000)

- 1 魚軋遺跡 2 上小東西遺跡 3 上梅沢館跡 4 鏡田遺跡(奈良・平安) 5 江尻遺跡(奈良～室町)  
6 下島遺跡(古墳～近世) 7 上小泉遺跡(縄文) 8 上梅沢遺跡(古代・中世) 9 HS-08遺跡  
(縄文・奈良・平安)

# I 魚躬遺跡

## 1 遺跡の位置と環境

魚躬遺跡は、上市川が平野に至り蛇行と氾濫を繰り返して形成した自然堤防上に立地する遺跡で、最も下流に位置する。今回の調査地は上市川河口から約300m上游の右岸に位置する水田地であり、標高は約2.3mである。

平安時代末期の京都・八坂神社文書にある『祇園社記』には、康治元年（1142）に開発領主の官道季式なる人物が祇園社に私領を寄進して成立した荘園「堀江荘」の中の一村として、現在の「魚躬」地区にあたる「伊遠乃見村」の名が記載されている。

## 2 調査経過

調査地は富山県滑川市魚躬708-8の一部であり、現在判明している魚躬遺跡の南東端に位置している。当該は個人住宅建設に伴い、平成8年9月に滑川市教育委員会により試掘調査を実施しており、その結果3本のトレンチで弥生～古墳時代ならびに中世の2つの包含層および中世の遺構の存在が確認されていた。これを受けて住宅2棟分の建築部分288m<sup>2</sup>の本調査を滑川市教育委員会が実施した。期間中は、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けるとともに、指導・協力を得た。調査は滑川市教育委員会野末浩之および富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事高橋真実が担当した。

調査は2棟分の調査区をそれぞれA区・B区とし、A区調査終了後B区に移って調査を行った。表土および黄褐色土は重機（バックホウ）にて掘削し、以下は人力で発掘調査を続行した。遺物密度は当初の予想を超えており、また粘土質で水はけが悪いうえさらに長雨が重なったため、調査期間を延長せざるを得なかった。結局、調査期間は平成9年5月29日から8月29日までとなった。



図2 魚躬遺跡 調査位置図 (1:10,000)

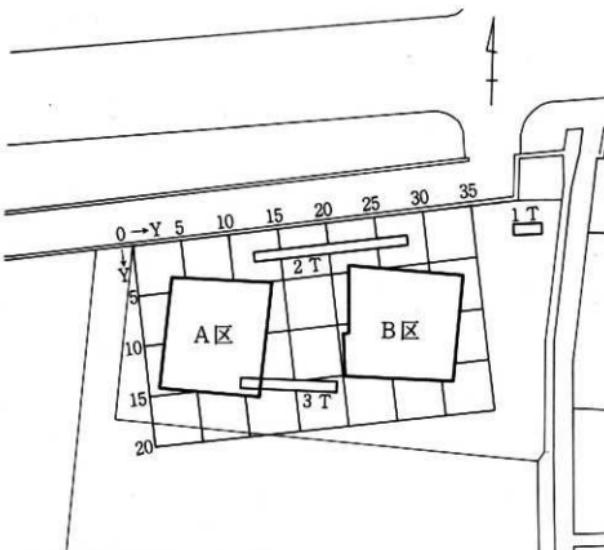


図3 魚躬遺跡 調査区 (1:500)

## 3 基本層位

当調査地の基本層位は以下のとおりである。

- ①層：暗灰褐色土（表土・耕作土）
- ②層：黄褐色土（間層）

- ③層：暗灰褐色土（中世遺物包含層）
- ④層：暗茶褐色土（弥生～古墳時代遺物包含層）
- ⑤層：黒色粘質土（弥生～古墳時代遺物包含層）
- ⑥層：青灰色シルト（地山）

中世遺構面直下から弥生・古墳時代遺物包含層となっており、特にA区においては中世遺構の覆土中からもこの時期の遺物が出土している。地点によっては④層が分層可能であるが、④層から⑤層にかけては断続的に遺物を包含している。地山面は概ね標高1m前後であるが、湧水点とみられ、大量の水分を含んでいる。⑤層は極めて粘性の強い粘土層であり、遺物量が多いもの人力による手掘りは困難を極めた。さらに⑥層を掘り抜くとポンプによる排水も及ばないほどの湧水があり、遺構の検出も困難であった。

#### 4 弥生時代から古墳時代の遺構・遺物

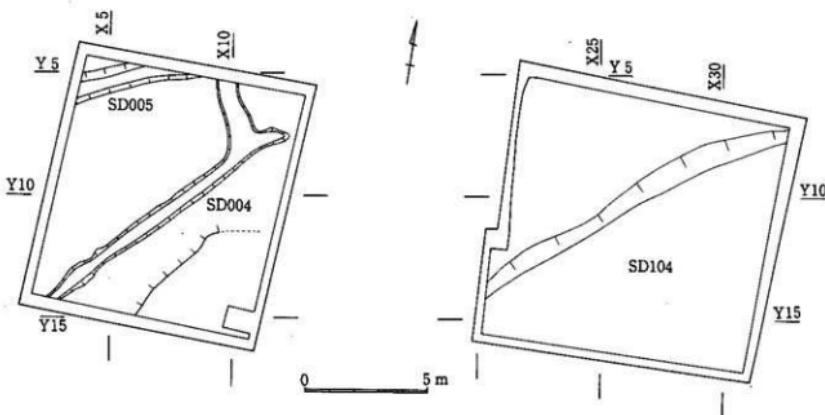


図4 魚跡遺跡 弥生から古墳時代遺構分布図 (1:200)

#### 遺構

**溝** A区においてSD004・005を検出した。SD004は幅50~100cm、深さは10cm程度である。北東方向へ延び北へ分岐するとともに浅くなっている。SD005も北東方向へ延び、幅100cm、深さ50cmを測る。B区のSD104は全掘していないが、川としてもよいほどの大溝で深さは90cm以上である。これらの溝はいずれも中世遺構面の直下で検出されている。

#### 遺物

**土器** (図5・6-1~48) 土器は中世遺構面の直下から最下層まで断続的に出土している。図5は④層、図6は⑤層の出土である。甕は④層においてはくの字口縁のものが多く、⑤層では複合口縁に擬凹線を施すものが多い。図示していないが、⑤層からは把手付鍋片、肩部に刻み目を入れる甕も出土している。赤彩土器も壺・高杯等一定量が出土している。図6-46は図上復原である。概ね④層は白江式・古府クルビ式の時期、⑤層は法仏式から月影式の時期に比定される。

**石製品** (図6-49) 砥石とみられる。破片であり本来の形態が不明であるが三角形の板状をなす。表面は一定方向への擦痕が認められ平滑になっている。この他、緑色凝灰岩片・翡翠片も出土した。

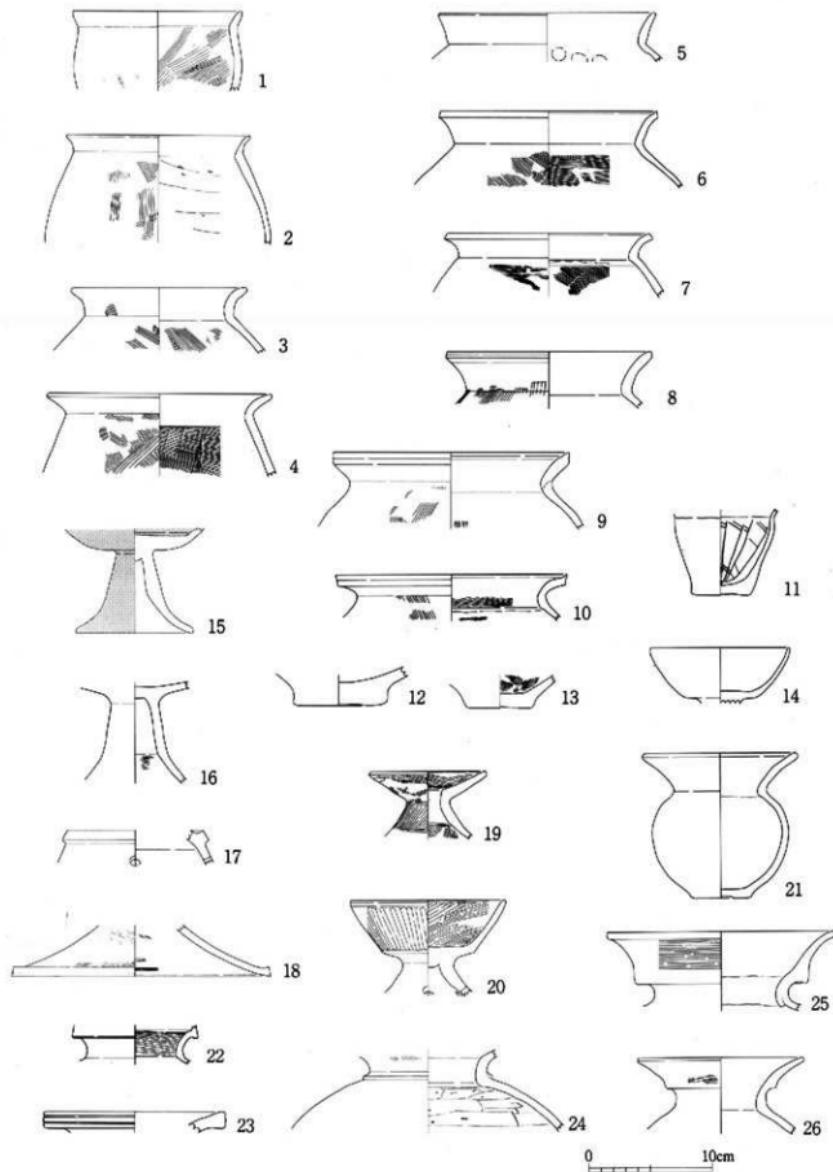


図5 魚骨遺跡 弥生から古墳時代遺物実測図(1) (1 : 4)

\*スクリーン・トーンは赤彩

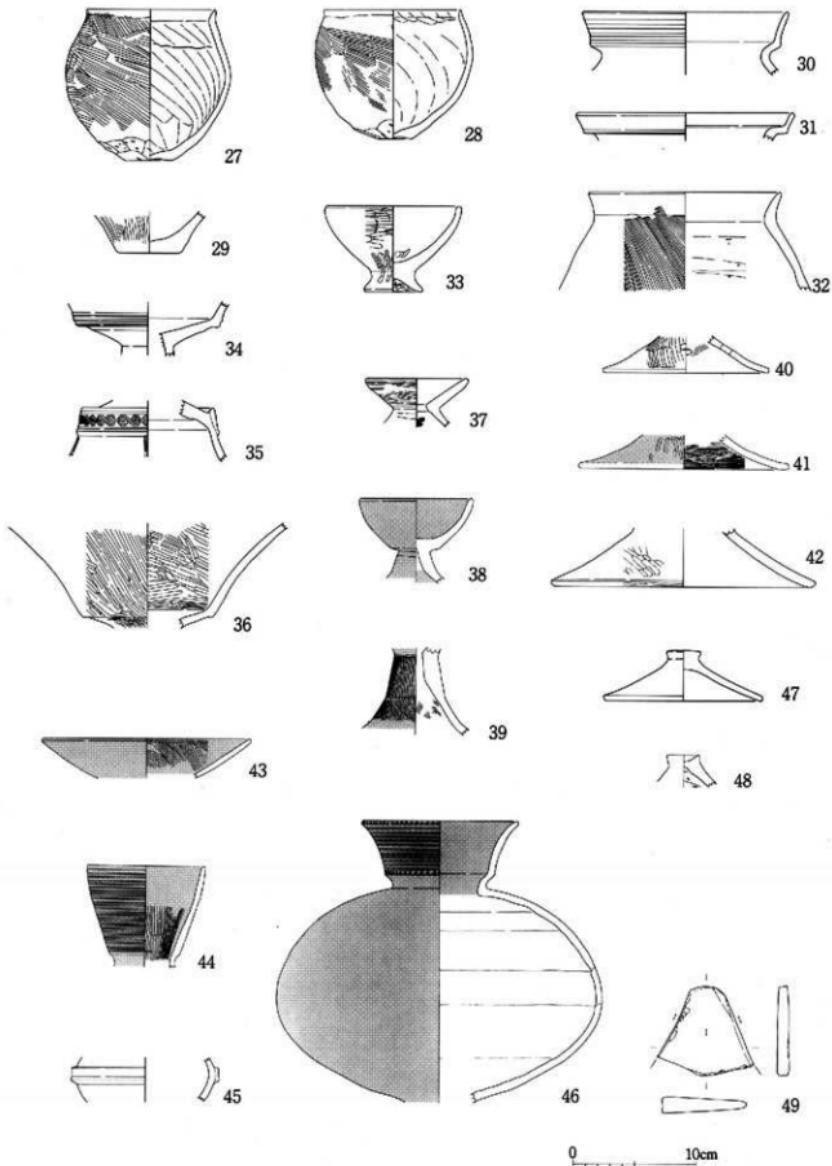


図6 魚釣遺跡 弥生から古墳時代遺物実測図(2) (1:4)

## 5 平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物

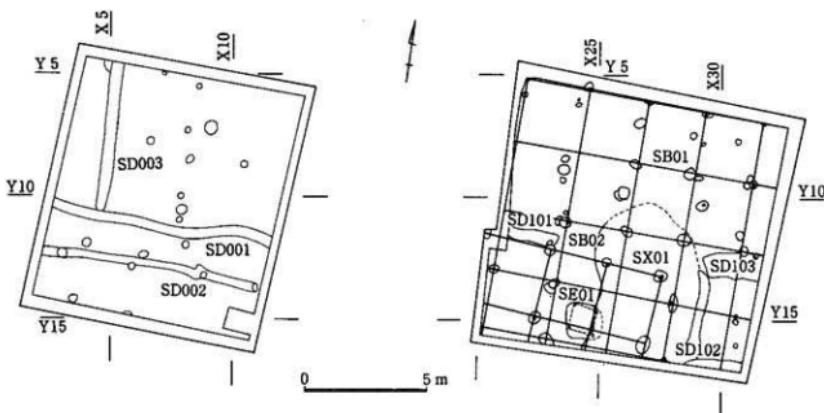


図7 魚骨遺跡 中世遺構分布図 (1:200)

### 遺構

**掘立柱建物跡** B区で2棟分を検出した。発掘面積が少ないため全体規模は不明であるが、中世初期における県内の掘立柱建物主軸の方向性から、両棟とも南北方向に主軸をとる建物と考えられる。SB01は桁行・梁行とも4間以上と考えられる大型総柱建物である。柱間の間尺は桁行が2.3~2.8m、梁行が2.3~2.5mであり、平面積は100m<sup>2</sup>以上となる。柱穴のうち4箇所に柱根が残り、基本的に面取りした芯去角材を据えており、礎板は用いていない。柱穴覆土から珠洲鉢、ロクロ土器器皿が出土している。SB02は桁行1間以上、梁行3間以上の総柱建物である。

柱間の間尺は桁行が2.8m、梁行が2.3mであり、平面積は21m<sup>2</sup>以上である。柱根が残る柱穴が1箇所ある。柱穴覆土から珠洲鉢・壺、ロクロ・非ロクロ土器器皿が出土している。

**井戸跡** B区において検出した(SE01)。主軸方向がSB01と一致し、柱間内の中間にさることからSB01に付属する施設と考えられる。一辺約90~105cm、深さ約150cmの井戸側が完全に残っていた。井戸側は縦板組隔柱横桟どめ型式である。南東隅柱は途中で外側に折れている。横桟は北面上段が2本となっているほかは各面上下に1本ずつはざ組されている。その形態には1類：横桟小口に横位に木楔を半ばまで打ち込みとほぞとするもの、2類：横桟小口の上部のみを矩形に削り取りほぞとするもの、3類：横桟小口上部または上下部を斜めに削り出しほぞとするもの、4類：横桟小口をそのままほぞ穴に差し込むか僅かに先細りさせるだけのもの、4タイプがある。各横桟のほぞ形態は表のとおりである。

覆土には大量に炭化物および植物質遺体を含んでいた。この炭化物は焼失材といったものではなく、ほぼ同大の小片であり、意図的に投入さ

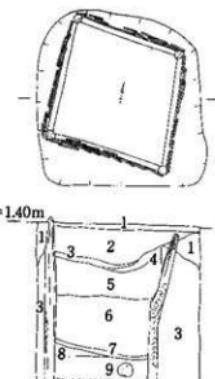


図8 魚骨遺跡 SE01実測図 (1:40)

- |          |                    |
|----------|--------------------|
| 1 黄褐色砂質土 | 2 暗褐色粘土 (燒土・炭化物多い) |
| 3 明黄褐色粘土 | 4 暗黄褐色粘土 (炭化物多い)   |
| 5 暗灰褐色粘土 | 6 暗灰褐色粘土 (炭化物多い)   |
| 7 明灰褐色土  | 8 6に同じ             |
|          | 9 炭化物層             |

	西側		東側		北側		南側	
北面	上段上	1類	4類	東面	上段	4類	1類	
	上段下	3類	2類		下段	4類	1類	
	下段	1類	3類	西面	上段	1類	4類	
	上段	4類	3類		下段	3類	3類	
	下段	1類	1類					

~103cmがある。SD001・101は幅80cm、深さ8cm、覆土は灰褐色土のほぼ単層であり、本来1本につながるものかもしれない。SD001西端部では下層に炭化物層がみられる。SD102・103も下層に炭化物層がある。

**不明遺構** B区の南中央部分では、中世包含層下部において割石を多量に含む浅い落ち込みがみられる(SX01)。SX01の東では不明確な溝へと連なる。覆土は炭化物や黄色粘土小ブロック、焼土も混じる。割石の中には火熱を受けたものもある。遺物はロクロ・非ロクロ土師器、珠洲が出土している。

#### 遺物

**中世土師器**(図10-1~21、図11-34~38) ロクロ成形(図10-1~6・21、図11-37・38)のものと非ロクロ成形(図10-7~20、図11-34~36)のものに分けられ、器種は柱状高台部(図10-21)以外はすべて皿ある。図11のSE01内出土の皿はロクロ成形のものが覆土6層、非ロクロ成形のものは2層と出土層位が分かれる。柱状高台部は12世紀中葉から後半である。その他は他の共伴遺物から12~13世紀頃のものであろう。

**輸入陶磁器**(図10-22~24) 遺物包含層からの出土で、龍泉窯系青磁鑄蓮弁文碗(24)・白磁小杯(22)・白磁碗(23)がある。白磁は概ね12世紀代、青磁は13世紀代である。

**珠洲**(図10-25~31、図11-36~39) 中世遺物包含層から壺・壺片が出土しているが、図示していないものも含めても珠洲編年のⅢ期までの時期に限定される。遺構検出面やSX01では小型壺・鉢、SB01・02の柱穴計3か所からは鉢口縁部が、SE01内覆土からは小型壺・鉢・壺が出土している(図11-36~39)。鉢は御目の施されるものは出土していない。これらの遺構出土のものはいずれも珠洲編年I~II期のものである。

**木製品**(図11-40~51) 木製品はいずれもSE01内出土で覆土6層を中心とする大量の炭化物とともに出土している。櫛(図11-40)、漆器椀(図11-41)、漆器皿(図11-42)、刀形(図11-43)、箸(図11-44~51)がある。椀は高台骨付および高台内以外、皿は全面に黒漆が施されている。ともに底部外側中央に刻文がある。北陸の漆器編年V期に比定される。刀形は長28cm、幅3cm、厚さ0.5cmを測る完形品である。刃部は中子に近い部分は薄く削り出されているが、切先付近は背部分と厚さは変わらない。箸は8点のみ図示したが、長20~25cmの完形品が55点のほか欠損品が数点出土している。両先端を細く削り出した両口箸である。図示していないが、この他折敷、下駄状に小孔を穿った縦19cm×横17cm、厚さ5~15mmの用途不明木製品等も出土している。

**その他** 土錐(図10-33)は包含層から出土している。SE01出土遺物として他にトチ、トウガン等の種子がある。

## 6 小 結

今回の調査により史料中にあらわれる中世「伊達乃見村」の様子を具体的に示す資料が得られた。従来弥生から古墳時代遺跡としての評価が高かったが、中世においても井戸を伴う掘立柱建物などが良好に遺構が保存されていること明らかとなった。遺跡全体に比べ調査面積が小さいため、あくまで一断面を示すにすぎないが、遺構・遺物の時期が12世紀中葉から13世紀初頭頃をピークに、以後はごく僅かとなってしまうことは、康治元年以後の堀江莊開関文書中に「伊達乃見村」の名が出てこないこととともに、この村の衰微を推測させる。今後の調査によりさらに詳細に村の全体構造や時期的変遷が明らかになると期待される。

下層の弥生から古墳時代においては、遺構は溝のみであったが、包含層内の遺物出土量が多く、特に⑥層中の遺物量からみて、地山面において堅穴住居跡などの遺構が残存している可能性が高いものと思われる。

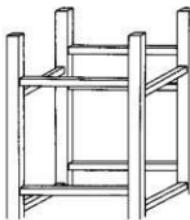


図9 魚釣遺跡 SE01構柱および横樋構造

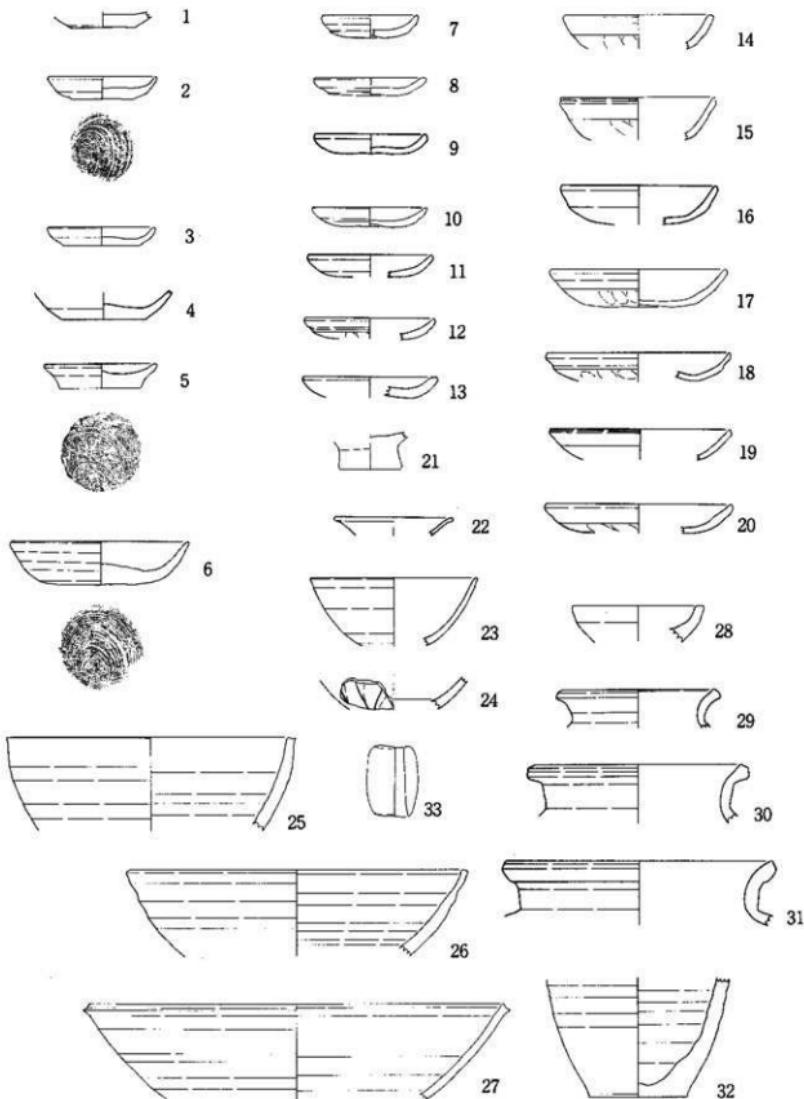


図10 魚鱗遺跡 中世遺物実測図(1) (1 : 4)

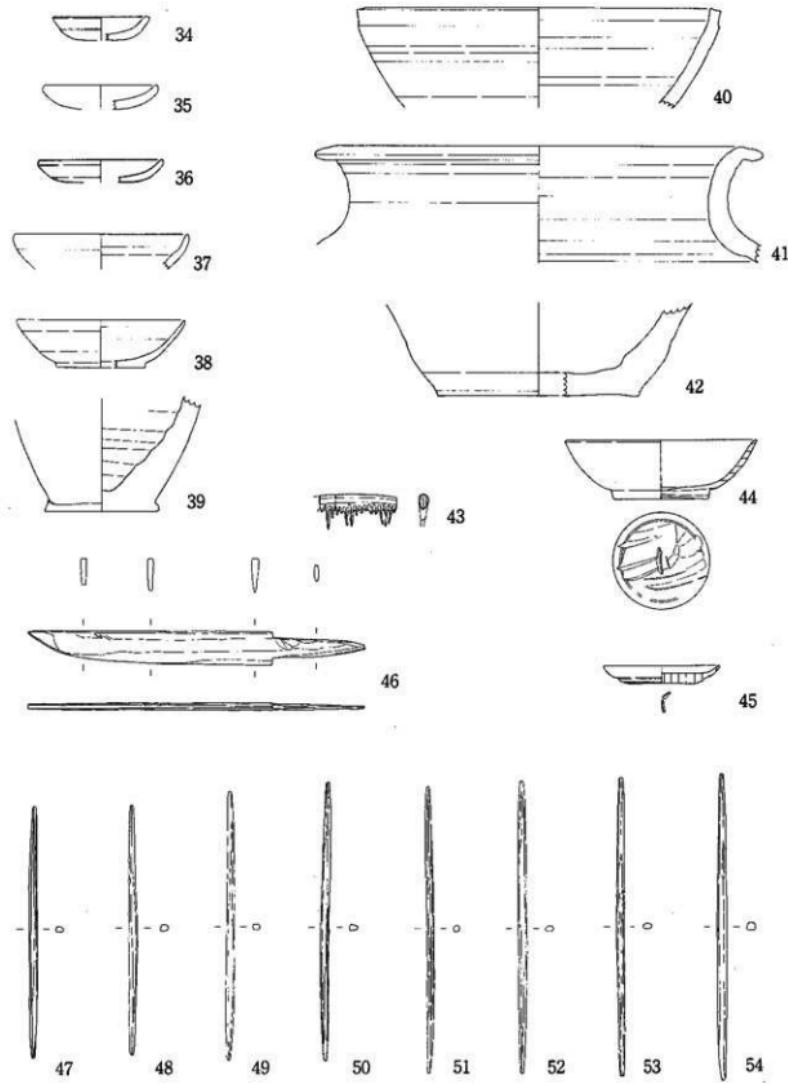
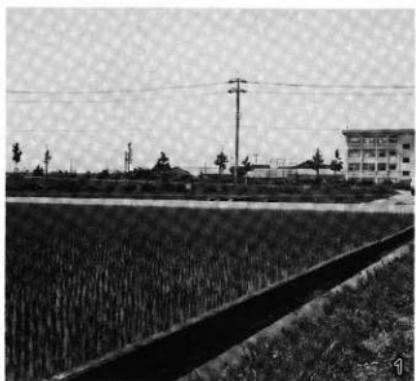
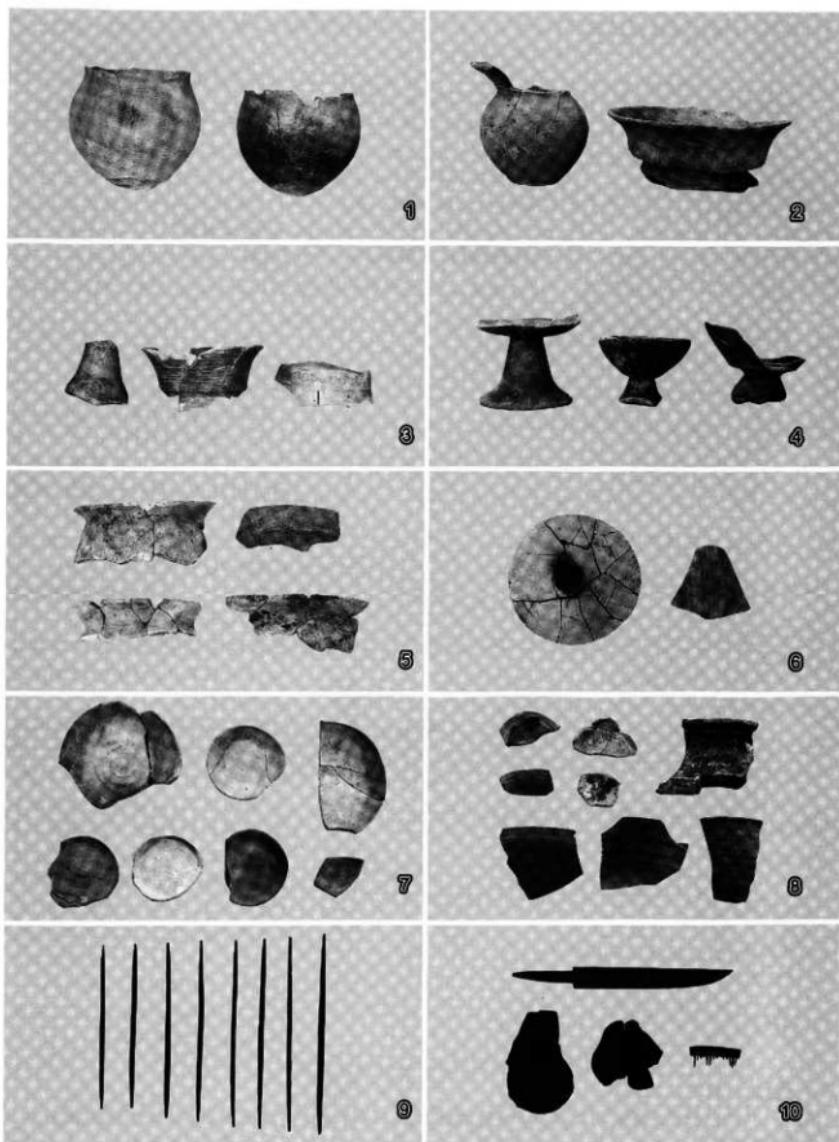


図11 魚骨遺跡 中世遺物実測図(2) (1 : 4)



魚鉤遺跡 遺構

1 調査地全景 2 SD005 3 SB01 4 SE01



魚鈎遺跡 遺物

- 1 小型甕
- 2 盍
- 3 赤彩高杯·赤彩壺·器台
- 4 高杯
- 5 甕
- 6 盍·砾石
- 7 中世土師器皿
- 8 中世土師器皿·珠洲 (SE01)
- 9 甕
- 10 刀形·漆器柄·漆器皿·櫛

## II 上小泉西遺跡



図12 上小泉西遺跡 調査位置図 (1:10,000)

### 1 遺跡の位置と環境

上小泉西遺跡は早月川扇状地扇端部、標高約9.5mの地点に位置する遺跡である。現在、扇状地上は早月川から分岐した中川等のいくつもの小河川が富山湾に向かって西流している。当遺跡付近には祇園田由来すると伝えられる行田(ぎょうでん)公園が付近にあり、中世堀江荘を経営した祇園社との関連が窺える。市街地周縁部ということもあり、近年は住宅地として開発が多くなっている。

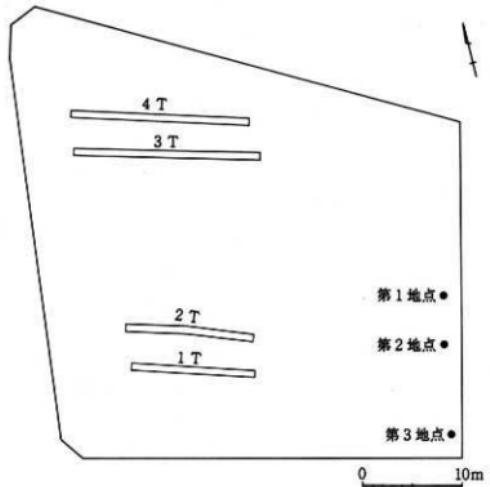


図13 上小泉西遺跡 調査区 (1:500)

### 2 調査経過

調査地は富山県滑川市上小泉259~263、調査対象面積は1,693m<sup>2</sup>である。共同住宅建設に伴い農地転用申請が提出されたため分布調査を実施した結果、現地はすでに重機により40cmほど掘削が進んでおり、耕土中に遺物の散布が認められるという状況であった。このため滑川市教育委員会では緊急試掘調査を平成9年11月27日から11月28日にかけて実施した。調査は滑川市教育委員会野末浩之が担当した。

調査は遺跡範囲確認のための試掘トレンチを4本設置して行った。重機(バックホウ)により遺物包含層まで掘り下げ、人力により遺構精査し、遺構および遺物の遺存状況を確認した。結果的にトレンチ調査では遺物包含層は極めて僅かしか確認されなかった。しかし、開発予定区域の一部に僅かに黒色粘土の遺物包含層が残っていたため、遺物採集を行った。この黒色土は3地点にみられ、いずれも40cmから60cm四方程度のごく僅かなものであった。

### 3 遺構・遺物

開発予定区域の東端、境界ブロック塀から約1.8mの地点(第1地点)に約60cm四方にわたり炭化物を含む黒色粘土層が残存しており、精査した結果須恵器・土師器が出土した。さらに遺物採集を進めていくと40cm×48cmの範囲に5個の石が環状に並んでおり、内部に深さ8cmの掘込みがみられた。炉跡と考えられるが、周囲はすでに掘削されており住居跡と確認することは不可能であった。この他の第2・3地点においては遺物の散布はみられたものの遺構は残存していないかった。

**土師器**（図14-2~12） 壺・高杯・壺・椀が出土している。赤彩の土器もみられる。壺はくの字口縁のものと複合口縁のものがある。高杯の脚部にも2タイプがある。椀はほぼ完形で底部に「+」が刻まれる。2~10は第1地点での出土で、11・12は第3地点出土である。

**須恵器**（図14-1） 有蓋高杯身である。口縁部の約3分の1を欠く以外は残存している。焼成堅緻であり、成形はシャープである。第1地点から他の多くの土師器とともに出土した。同器種の別の脚片が1点出土している。

#### 4 小 結

対象地のはほとんどがすでに搅乱を受けており、一部に包含層を残すのみという状況であった。しかし、調査によらず採集された良好な遺物および一部検出された炉跡とみられる遺構の存在により、当地には本来住居跡が存在していたものと思われ、さらに調査地周辺にも遺跡が広がっているものと考えられる。

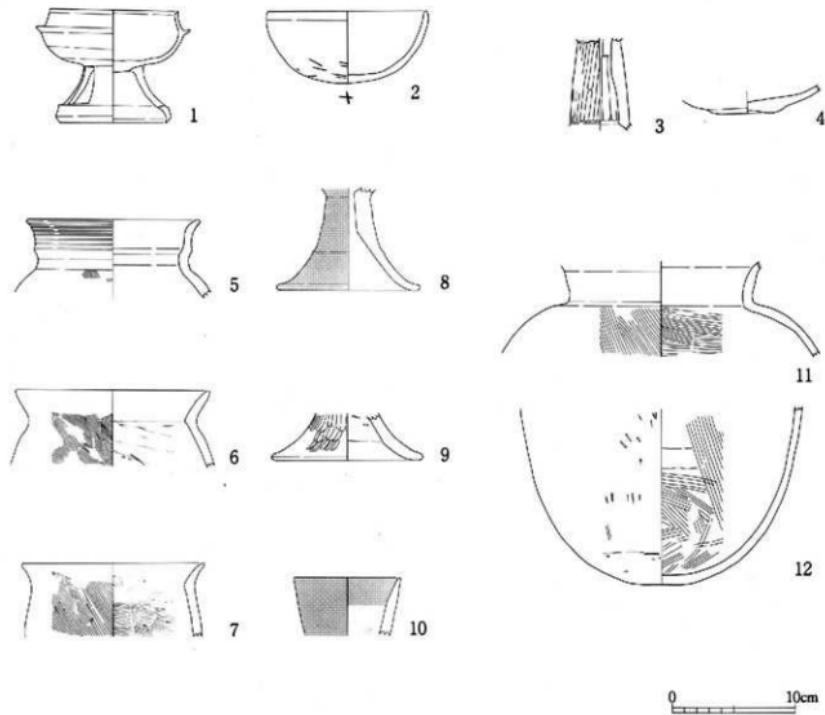
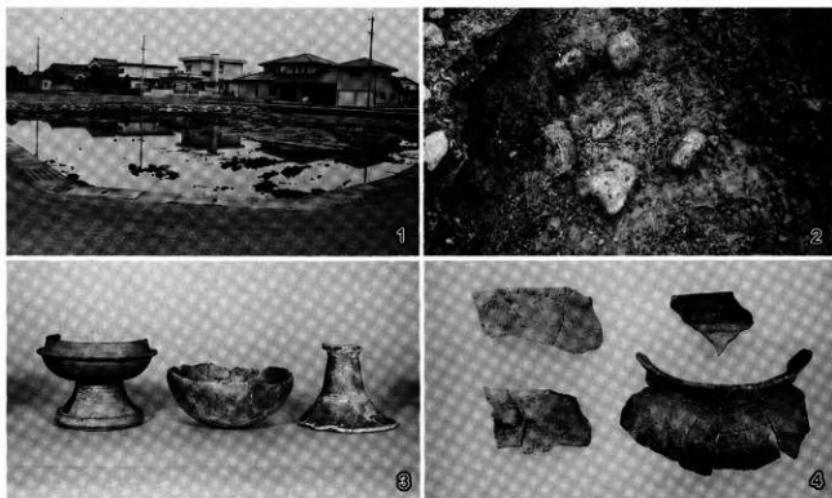


図14 上小泉西遺跡 遺物実測図 (1:4)



上小泉西遺跡  
1 調査地全景 2 炉跡 3 須恵器・土師器 4 土師器

### III 上梅沢館跡



#### 1 遺跡の位置と環境

上梅沢館跡は滑川市上梅沢地内、早月川扇状地扇央から扇端部にかけての僅かに西に傾斜する地形上に位置し、現在周辺は田園地帯が広っている。旧梅沢村は中世堀江荘を構成する一村である。遺跡は現在の光明寺境内および周辺に比定され、光明寺境内の東西境界あたりには今なお土壘の一部が残っており、典型的な中世の平地式方形単郭居館と見られる。文献史料はやや南北が長いがほぼ方形に土壘がめぐり、さらにその外側に堀跡もあったと伝えている。土壘の外側の堀跡とみられる部分は、明治期の地籍図でも確認できるが、現在は水田・道路・墓地・宅地となっており判然としない。館主については、当地の1.4km南に所在した堀江城を中心に勢力をもつた土肥氏の一族とも考えられている。

#### 2 調査経過

調査地は富山県滑川市上梅沢336、調査対象面積は775m<sup>2</sup>である。当調査地と光明寺との間には古くから民家が建っているが、堀跡などの検出により遺跡の東境界が判明する可能性が考えられた。このため個人住宅建設に伴い遺跡範囲確認のための試掘調査を平成9年3月9日から3月10日にかけて滑川市教育委員会が実施した。調査は滑川市教育委員会野末浩之が担当した。なお、調査地の標高は18.5mである。

調査は遺跡範囲確認のための試掘トレンチを6本設置して行った。重機（バックホウ）により遺構面まで掘り下げ、人力により遺構精査し、遺構および遺物の遺存状況を確認した。

### 3 造構・遺物

造構はいずれも表土層直下で検出した。井戸跡(SE 1)は調査対象地のほぼ中央部に位置している。掘り方内部には約65cm×85cmの規模で縦板組隔柱横桟どめの井戸側が残存していた。縦板は1枚のみ残っていた。井戸側の方位は短辺がN-35°-Eである。黄灰色ブロック混じりの黒灰色覆土上面には20~30cmの石2個が置かれ、井戸内部の覆土より須恵器杯片および土師器片2片が出土した。井戸側と遺物が確認された時点で造構掘削を中止したため、井戸下部の構造・遺物については不明である。

この他6か所の土塙があり、その中の一部の土塙は覆土が井戸跡と同様であった。造構検出面からは珠洲甕片も出土している。集石造構3か所も認められたが、遺物の出土もなく時期は明確にできない。

### 4 小 結

今回の調査により、当初可能性が考えられた堀跡は検出されなかった。堀跡は調査地南側の民家宅地に存在していた可能性が強まつたと思われる。出土した造構は明確に時期の判明する遺物に乏しいが、井戸跡などの状況から平安から中世にかけての集落遺跡が存在しているものと考えられる。上梅沢館とも何らかの関係を有するものとみられる。

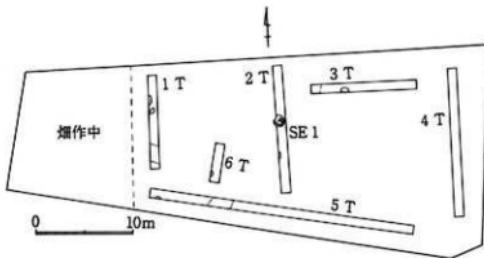


図 16 上梅沢館跡 調査区 (1:500)

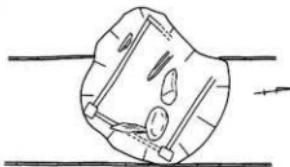


図 17 上梅沢館跡 SE 1 実測図 (1:40)



上梅沢館跡 1 調査地全景 2 SE1



上梅沢館跡 2 SE1

### 主要参考文献

- 宇野隆夫 1989 「井戸考」『考古資料に見る古代と中世の歴史と社会』真陽社
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館
- 宮田進一 1994 「掘立柱建物」「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）」財富山県文化振興財團埋蔵文化財事務所
- 越前慎子 1996 「梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年」「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書（遺物編）」財富山県文化振興財團埋蔵文化財事務所
- 大川 清他編 1996 『日本土器事典』雄山閣
- 四柳嘉章 1997 「北陸の中世漆器」「中・近世の北陸－考古学が語る社会史－」桂書房

## 報告書抄録

ふりがな	なめりかわしまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう							
書名	平成9年度滑川市埋蔵文化財発掘調査概報							
編著者名	野末 浩之							
編集機関	滑川市教育委員会							
所在地	〒936-0056 富山県滑川市田中新町39-4 TEL 0764-75-2111							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東經 ° °'	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
市町村	遺跡番号	16206	206008	36° 45' 13"	137° 19' 22"	19970529 19970831	288	個人住宅建設に伴う本調査
上小泉西 遺跡	滑川市 上小泉	16206	206055	36° 45' 20"	137° 20' 58"	19971127 19971128	1,693 (対象面積)	共同住宅建設に伴う試掘調査
上梅沢館跡	滑川市 上梅沢	16206	206013	36° 44' 33"	137° 21' 40"	19980309 19980310	775 (対象面積)	個人住宅建設に伴う試掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
魚躬遺跡	散布地	弥生・古墳 中世	溝	土器				
			掘立柱建物・井戸・溝・土塙	中世土師器・珠洲・刀形・箸・漆器碗・漆器皿・櫛・須恵器・土師器				
上小泉西遺跡	集落跡	古墳	炉	須恵器・土師器				
上梅沢館跡	城館跡	古代・中世	井戸・土塙	須恵器・珠洲				

平成9年度滑川市埋蔵文化財発掘調査概報

平成10年3月  
編集・発行 滑川市教育委員会  
印 刷 鮫坂印刷

